ーただキリストと共に歩むー

水戸無教會

編集　半田梅雄

第十号

静かな所にて神は待ち給う

半田梅雄

例年の事ながら、クリスマスの祝に引きつゞいて、年末、年始の諸行事が始まる。年に一度という観念も手伝う故か、これらの行事にはいろいろな準備がされ、晴の一日又は数日を賑やかに過すことが習慣となっている。勿論これらの行事を通して、一年の締めくゝりとなし、思いを新にして再出発を期することも必要であろう。又日頃の疲れを医し、平素疎遠な人々と旧交を温めることも決して意味のないことではない。然し実際にはそうしたよい目的とは逆に、義理や慣習に縛られて、随分苦しいやりくりや、疲労の上塗りをしていることも争えない事実であろう。

その最大の原因は、変化と刺激を求める方法が、享楽と結びつくからである。人々は住居、衣服、飲食にいろいろ趣向をこらして、人間の官能を満足させることに全力を盡している。クリスマスの馬鹿騒ぎに始まり、年末年始の贈答饗応、多彩な催し、その上着飾って好んで人混みえ自分を見せびらかしにゆく。そして折角新鮮な気分で、仕事に移ろうとする頃はクタクタになっているのが落である。これでは何のことやらさっぱりわからない。

「さて旅行から帰った十二人の使徒たちはイエスの所に集まって、したこと、教えたことをのこらず報告した。彼らに言われた。『さあ、あなた達だけどこか静かな所へ行って、しばらく休んだがよかろう。』人の出入りが多く、食事する暇もなかったのである。」（マルコ六・三〇～三一）

これは勿論年末にイエスが言われたことではない。然し一年の馳場を走り続けた者に、これ以上適切な慰めの言葉はないであろう。この一年、社会的にも国際的にも、人と人の織りなす青や赤や様々の此の世の炎に取り囲まれて、これとたたかい乍ら私達は辛うじて年の瀬にたどりついた。何を好き好んで、更にこの上に無駄な苦労を積み重ねる必要があろうか。友よ！静かな所へ行こう。そこには無限の慈愛をこめて、父なる神が待ちたまうではないか。

サタンの主張と陰謀（イ）

―ヨブ記研究（四）―

大森孝夫

道徳的にも信仰的にも本当に模範的な人物であったヨブに何故あの想像を絶した苦難が与えられるのであろうかということ、即ち私たちは前回の勉強からもヨブ記の問題は私たちの及び難い深刻性と永遠性を有するものであることを痛感させられたのであります。

然し前回まで学びました部分は、ヨブ記の記者が当時一般に信じられていた教理を示すために書かれたとも考えられるのであります。即ち古代のヘブル人たちは神は善悪に応じて報われるのであって、義人には幸福（物質的）を悪人には災禍を与えられるのだという、いわゆる因果応報の教理を信じていたのであります。従って道徳的にも宗教的にも模範的なヨブに対する物質的繁栄は当時の信仰からいって当然なる神の報酬でありました。

扨て舞台は地上から一転して一章六節から一二節までは天上に於ける第一回の神と神の子たちの会議の場面を展開致すのであります。天上の会議とは神の子たちが相会し、エホバに謁見すると共に彼らが全責任を負っている一定区域の統治状況を報告しかつ、新たなる使命を受けるための会議であります。七節から神エホバとサタンの問答が開始されますがその問答に入る前に聖書の中にしばしば出て参りますサタンのことを調べてみたいと思います。聖書語句事典を見ますと旧約聖書中、サタンという名称そのものが出て参りますところはヨブ記の外に歴代史略上二一章一節とゼカリヤ書三章一、二節であります。サタンは「敵手」「反対者」の意味をもっております。サタンは新約聖書（ペテロ前五の八）では敵なる悪魔でありますがヨブ記中のサタンはそうではありません。学者は彼を「イスラエルの自責的良心の人格化と説明しておりますがヨブ記のサタンはまだ神の使者なのであります。（ゼカリヤ書、歴代史略とサタンは冷酷なる反対者となっていき、歴代に至るともはや神の使者ではありません。神の業を破壊する悪霊である）たゞ神の使者僕とは云え堕落した無頼漢であります。世界中を駆け巡り人間の行為を邪推して常に疑惑と猜疑の眼を以て観察するのです。人間の美点ではなく欠点暗黒面のみを注視するのがサタンの仕事です。サタンは人間の偽善を十分知っています。サタンは人間の宗教も道徳も表面は如何に美しく、立派に見えても結局みにくゝ汚い利益と名誉を追う心の変形に過ぎないのだと断定するのです（現代宗教人に対する鋭い批判！）サタンはヨブの敬虔、信仰は眞実に非ず仮面をかぶれる利己主義なりと皮肉を一杯口にこめてエホバにかく云い放ったのであります。「ヨブあにもとむることなくして神を畏れんや」。

予言の成就

―使徒行伝研究（五）―

半田梅雄

一章十五節～二十六節

○イエスの十字架の時、その弟子であることを三度否定したペテロ（マタイ二六・六九～七五）も今使徒たちの中で長兄らしい態度を示す。

○ペテロの第一回演説「聖霊がダビデの口を通して預言した言葉（詩六九・二五）は成就しなければならなかった。」として、自己の欲望の為にイエスを売った不義者の代表の如きユダの役割とその最後をのべている。不義者、悪人に良き結果が来ないという思想は決して珍しいものではない。それが彼らの誇る先祖の一人ダビデの口を通して云われた言葉の成就とみる態度は注意する必要がある。ユダヤ人にとって、生活の根本原理は、天地創造の創世より始まる歴史の進展がすべて神の計画に基くものであるという信仰である。神は我々の観念の中で勝手に造り上げるイメージではなく、歴史を通して具体的にその意思と能力を示し給う方であることを彼らは信じて疑わない。殊に多くの先祖、予言者を通して語りかけ給うた神の言は、彼らが寝る間も忘れることの出来ない輝かしい栄光の子となる約束である。厳として義を貫き、全き愛をもって人を恵みたまう神の約束、ペテロがこれによって、ユダの最後を語ったのは極めて当然のことである。

キリスト教の土台をなすものはこの予言者を通して示された神の約束であって、多くの歴史家が、歴史進展の方則を相対的な因果関係に原因を求めたとしても、それは高々ある時間的制約から眺めた歴史観に過ぎない。究極に於て人間は造られたものであって、創造者ではない。勿論予言者といえども時代の子である以上、時代的制約を受けないわけはないが、その表現のテクニクを超えて輝く眞理の光は、何者もこれをおゝうことが出来ない。ユダヤ民族に課せられた使命は実にかくの如きものであった。

○二二節以下、くじ引によって使徒職を選任することが必要かどうか疑問だが、その選任の目的は注目に値する。即ち「復活の証人にならねばならない」とペテロは云う。人間の復活が、どのようなものであり、どのようになされるか不明であるが、この場ではそれは既定の事実として語られ、誰も怪んでいる模様は見えない。のみならず使徒行伝の中心は復活のイエスによって占められている。イエスの復活と、聖霊の降臨を除けば、使徒行伝は全く意味をなさない。効力を失った塩である。復活を説明してもその効は薄い。それは信仰によって始めて解かれるなぞである。なぞであるが厳たる事実である。

ピリピ書研究（二）

半田信子

記者ーパウロ
場所ーロマの獄中（使二八・十六以下参照）
年代ー紀元六三年頃
宛先ーピリピの聖徒及監督・執事（ピリピ一・一使十六・九以下参照）
時期ーエパフロデトの手よりピリピ人の賜物を受けたる時の返事（ピリピ四・十～十八参照）
大主意ーキリスト信者の経験

本書が、獄中でかゝれたことは、パウロ自身の言葉からも明らかに知ることが出来る。（ピリピ一・七、十三、十六、十七）何処の獄舎かについては、種々の説はあるが大体ロマに於てかゝれたと一般的に認められている。（使二八・十六以下参照）そして、本書内に多くの証拠となる言葉を見出すことが出来る。即ち、ピリピ一・七～十三に縲絏にある時に書かれたと、明白に記されてある。しかも、十三節には近衛の保護の下に縲絏にあったと記されてある。四・二二には、カイザルの家の者よりの挨拶が載せられてある。又、殊に一・二十～二十六、二・十七には、何時殉教の血を流さねばならないかもわからぬパウロの心持が表れている。などである。

本書が、ロマの獄舎に於てかゝれたとすると、使徒行伝の記事からも解る様に、パウロの生涯の終り頃と思われる。その理由として次の様な事があげられる。

一、一・十二以下によると、本書のかゝれたのは、ロマに於て牢獄生活を可成り長くやった後であったと想像される。

二、ロマとピリピとの間に数度手紙の往復した後、本書は書き記された。（ピリピ四・十六、哥後十一・九などにより、パウロはこれまで度々ピリピ教会から、情のこもった贈物を受けたことを知ることが出来る。そして、パウロは、その度毎に感謝の意を表すと共に、信仰上の強き奨励と慰安となる手紙を送ったと思う。従って本書は、パウロがピリピ教会に書き贈った唯一の書簡ではなく、此等の書簡の中の最後のものであったと思われるのである。）

三、ルカは、ピリピに長い間住んでいたから、ピリピには多くの友人が居た筈である。然し本書には、ルカよりの挨拶は一言ものせられていない。それでルカの出立の後であったろうと想像される。二・十九、二十によれば、テモテの他に誰もパウロと共に居なかった。（コロサイ書には四・十四にルカよりの挨拶が記されている。これはパウロがコロサイ書を書き贈る時、ルカが共に居たことを意味する。）

四、二・二五節以下の記事によると、ピリピ教会を代表して、はるばるロマにパウロを訪れて来たエパフロデトは、ロマ到着の後重い病にかゝっていたが、後、健康を恢復してピリピに帰ろうとする時に、本書はかゝれたものである。

そして、パウロが始めてピリピに福音を伝えた時から、およそ十年後に相当する。

（つづく）

人は如何にしてイエスに来る事が出来るか

（ヨハネ三・二〇、二一によって）

石原秀志

ヨハネは、イエスと世との対立を、光と暗黒との相こくとして展開した。ひとり子の父なる神の愛は世に対して顕れた。イエス・キリストが世に来り給うた事がそれである。然し、彼は世に来り給い、世にある人間の唯中に来り給うたのに、人は敢てイエスに来ようとはしない。

ヨハネによれば「光」が此の世に来たのに、その悪しき行為の故に、「暗黒」の方を愛した。のみならず、彼等は「光」の存在、その到来に対して憎しみを抱いたのである。その憎しみは恐怖につながっていた。何に対する恐怖であったか。彼等の行為が明るみに出される事に対してであった。それは丁度土中に住む極小の虫類を追って常に日の光を避け乍ら地下の活動を続けている土龍の如くである。土龍は碧空の下光の降り注ぐ爽かな大気と緑の世界を知らないで、彼自身の行動する池中こそ最も好ましい天地であると考える。罪の下に閉ぢ込められ、暗黒を己が天地とする人間も亦「光」の輝しさと明るさとに耐え得ないで「光」の世界に強い反発撥を覚えるのである。而も多くの人々は土龍と同様に、己の惨めさを意識することが出来ないでいる。そして此の事こそ「審き」であるとヨハネは告げる。

それでは、人は如何にして此のような惨めさから脱出して、光の唯中に飛込んで行く事が出来るのであろうか。「しかし眞理を行なっているものは光に来る」とヨハネは言う。けれども、罪の僕以外であり得ない生れ乍らの人間の中に凡そ「眞理を行う」能力があるのであろうか。「血すじも、肉の欲も、人の欲も」眞理を行わせる事は出来ない。人間の素質も、意思も、努力も、眞理を生み出す力はないのであるから。その意味では如何なる人間も「光」に来る事は遂に望み得ない。

それにも拘らず、イエス・キリストは「光」として我等の唯中に来り給うた。我等は之を厭い、憎み、之に背を向け、眼を閉じる。その事によって我等の惨めさは一層明らかにされる。併し、遂にそのような背き、そのような惨めさに耐え得なくされる時が訪れる。その時、彼は既に「眞理を行っている者」＝「その生き方が眞実である」（モファット）とされているのではないか。誠に、己が惨めさの底にある事を意識し、そのような状況に到底耐え難い事がはっきりと自覚されるその時こ

そ、彼のうちに眞実が芽生え、眞理への模索が始められる時である。そしてその時、それ迄「光」に背き、「光」を却け、「光」より逃れようとしてもがいていた一個の人間が、突然見えない聖手に捉えられてしまった事を悟る。かくて彼はグイグイと「光」に引寄せられてゆく。生れ乍らの人間は之に抵抗を試みるが、遂にその抵抗が全く無力なものであると知った時、彼は完全に「光」の唯中に置かれている自らを見出すであろう。かくて、実は彼が「眞理を行って光に来た」と言うよりは、彼が「眞理」に觸れた時に、暗黒の中より引出されて「光」に連れて来られたのだと言わねばならない。そしてそれは彼の側について言えば、徹底的な惨めさと無力との自覚が出発点となったのであり、それを可能ならしめたのは唯測り知る事の出来ない聖手の導きに外ならない。

後　記

一九五五年も愈々あと二日をもって終了する。このパンフレットが届く頃、人々は新年の祝辞のやりとりに忙しいことであろう。それはとも角、この年に於ける小さな歩みを省みて些か記して置きたい。

三月、水戸無教会誌創刊、今月をもって十号となった。薄い貧弱な雑誌だが、この小さな証しが、みこゝろに適い、福音の前進に少しでも役立つなら、外に言うべきことはない。

四月、石原兵永先生をお迎えして、医師会館で「生けるキリストの信仰」と題する御講演を伺う。今、病の床にある先生の上に更によき賜物が与えられ、尊い御使命が果されるよう祈ってやまない。

七月、黒崎先生による夏期聖書講習会、西山という由緒深き土地に福音の火の手上がる。講習会によって播かれた種子は、ぐんぐん成長しゝつある。

九月、夏期聖書講習会記録発行、多くの人々から主えの讃美限りなし。

十月、日立市にて酒枝義旗先生の「世界史の夢と現実」の御講演を伺う。

十二月二十二日、水戸市医師会館に「教会なき人々の為のクリスマス集会」を開く、参加者約四十名。松本兄の講話の後、兄弟が交々立って感話を語った。

日曜毎の聖書研究は、ガラテヤ書に続いて、ヨブ記、ルツ記を完了した。新春より茨大に教鞭を取る石原秀志兄が講義担当の予定。題は未定である。

土曜毎のギリシヤ語勉強は、茨大教授の福富啓泰先生に導かれ、二十九年四月より始められたが、三十一年四月で第一期終了予定、愈々待望の聖書勉強に入れるわけである。平均年令四五才になろうという老年組だが、意気まことに壮である。

ではみなさんよいお年をお迎え下さい。　（半田）

昭和三十年十二月　発行
水戸無教会第十号
実費十円〒共
編集兼印刷人　半田梅雄
発行人　松本文助
発行所　水戸市東原町四六四二
水戸幼稚園内
水戸無教会